

孤立死について考える

となり近所の誰にも気づかれることなく、死後数日、長いもので半年、一年と経過してから発見される、いわゆる「孤立死」は、今や大都会の社会問題ではなく、倶知安町でも年間に数件発生する身近な社会問題として、多くの人に認知されています。

このように、周囲の誰にも気づかれることなく亡くなられる人々の多くは、自ら望んで地域の中で孤立しているのではなく、加齢による身体機能の低下や、障がい、貧困、転勤や転居などの事情により地元（故郷）を持たないなど、様々な原因によるものと思われますし、となり近所や地域もそうした人たちを排除したり孤立させているわけでもなく、現代のライフスタイルのうえに、いつの間にか、本人も、周囲も気づかぬうちに孤立していくものと思われます。

誰もが関係しうる身近な問題として、誰も孤立しない、させない地域社会を目指し、社会福祉は地域住民が支え合うという社会連帯の考え方を基礎に、地域住民が主体的に活動する「新たな支え合い」の仕組みづくりを課題として、「ともに支え合う、安心、安全福祉のまちづくりを」を、当事者である住民が主体となって作り上げていくことを目的として、3月9日（土）ホテル第一会館を会場に、第24回倶知安町福祉フォーラムを開催しました。

町内会や老人クラブなど地域活動の実践者や行政、福祉関係者など200名余りが参加し、「孤立死について考える」をテーマに、講師にNPO法人シーズネットさっぽろ孤立死ゼロ推進センターの事務局長、杉谷憲昭氏に講演をいただきました。杉谷氏は、孤立する人たちの、孤立に至る経過や現状、予防策として地域でのサロン活動などについて提言をいただきました。



講演に続いて、体験発表ということで、第62回社会を明るくする運動作文コンテストにおいて優秀賞を受賞した作文「見て見ぬふりと今の日本」を書いた倶知安中学校3年生（当時）の佐竹葉奈さんに発表してもらいました。（作文は次のページに掲載しています）

その後、北斗振興会会長の石田正三氏、倶知安町地域包括支援センターの大平伸子係長、倶知安町社会福祉協議会の太田憲行係長の3氏をパネラーに、講師の杉谷憲昭氏を助言者として、倶知安町社会福祉協議会の清水健治副会長の司会によりパネルディスカッションを行いました。

石田会長は、町内会における孤立を防ぐ取組みについて、大平係長は行政の立場から孤立死を防ぐ取組みについて、太田係長は地域で孤立を防ぐ取組み（サロン活動）を社協としてどのように働きかけていくか、ということそれぞれの立場で発表していただきました。



参加者からは、「孤立死はどこか他人事のように思っていたけれども、誰にでも起こる身近な問題と感じた」など、地域として、孤立した人を出さない、何が孤立させる原因となるのか、町内会等で相談したいという感想が多く寄せられ、安心、安全な地域社会づくりへのヒントをつかんでいただけたのではないかと感じられました。